今、最も注目される教育旅行先～松山

愛媛県松山市は、「ほんもの体験」「交流・ふれあい」をテーマに、日本のエーゲ海と称される風光明媚な瀬戸内海の風土が育んだ、全国有数の柑橘産業や歴史・文化と、日本最古の湯・道後温泉や日本最後の完全な城郭を有する松山城などの地域資源を、「教育」という視点から改めて洗い出し、磨きをかけ、差別化を図りながら組み合わすことで、今、最も注目される修学旅行先となった。瀬戸内と松山市の取り組みを中心に紹介する。

進化した教育メニュー

松山市は、修学旅行の受け入れで「生徒が成長する旅」をコンセプトに据え、「成長を実感できる魅力の体験メニュー」を提案している。メニュー化では、教育的視点から地域資源を磨き上げ、様なメニュー構成に努めている。同時に、学校の希望に沿う柔軟な姿勢での提案に注力している。

ある学校の生徒アンケートでは、満足度95%の高い数値を上げていた。

道後温泉本館前から人力車で夜の散策へ

自然環境や第一次産業、水軍文化など多彩な素材

さらに、修学旅行を通して始まった学校間交流、授業での体験メニューの採択など、旅行後のさまざまな展開につながっている。

瀬戸内海ゾーン

国産農産物の凄さを学ぶ――みかんの島・中島

瀬戸内海に浮かぶ中島は、みかん王国・愛媛ナンバーワンの柑橘の島。チャーター船を使えば、広島から約1時間で直接上陸できる。修学旅行生には、港で地元保育園児の歓迎が待っている。

みかんの収穫体験では、農家の人たちから栽培の話やおいしいみかんの見分け方などを直接聞き、一緒に収穫する。収穫時期は10月から5月までの約8カ月間。摘みたての味と香りは、中島に来たからこそ堪能できるほんもの体験だ。

また、延長500㍍の美しい姫ヶ浜ビーチでは投げ釣りを体験し、釣った魚は昼食の海鮮バーベキューで一緒に焼いて食べることもできる。このほか、生徒が協力して行う地引網の体験メニューもある。

しまなみ海道満喫体験――水軍の里・大島

愛媛県今治と広島県尾道を結ぶ瀬戸内しまなみ海道。今治へは、松山市内から車で1時間。ここから始まる定番のメニューは、世界で唯一の自転車で渡る「橋上サイクリング」だ。瀬戸内海の島々を眺めながらのサイクリングは爽快そのもの。

今治を後に最初に訪れる大島では、昼食の海鮮バーベキューが待っている。体験では、観潮船で瀬戸内の急流を体感し、自然の力や雄大さに触れる。島内の村上水軍博物館は、日本唯一の水軍博物館。海原を自在に駆けめぐった村上水軍の貴重な文献や出土品から、日本の水軍文化が学べる。

中島でのみかんの収穫体験

松山ならではの「俳句吟行」を体験

松山・道後ゾーン

松山市は「いで湯と城と文学のまち」として知られている。いで湯では道後温泉が、人気温泉地ランキング2013で中国四国エリアの第1位に選ばれている。加水加温をしていない源泉100%でも知られている。その道後で日本最古の湯と呼ばれる「道後温泉本館」は、ミシュランガイドブックでの三つ星最高評価や映画「千と千尋の神隠し」の油屋のモデルとしても有名だ。

城については、日本三大平山城に数えられる松山城が、市の中心部に聳えている。本丸のある標高132㍍の勝山山頂からは、瀬戸内海や西日本最高峰の石鎚山まで一望できる。文学のまちとしては、俳人正岡子規をはじめとする文人ゆかりの歴史的、文化的資源が町中に多く点在している。

同市には、教育素材として「松山はいく」と名付けたメニューがある。まち歩きを意味する「ハイク」と、事物を洞察して文字に表す「俳句」の学びの視点を取り入れたものだ。実際のメニューは6・7%が4・0%でともに下がった。

宿泊形態の構成比率を前回調査と今回で比較すると、ホテル形態は前回59・5%が今回60・1%で微増、日本旅館形態は前回32・6%が今回31・7%で微減だった。

そうした中、増加したのが農山漁村民泊で前回調査1・9%が今回2・7%になった。

船中泊はすべて公立校で、その80%は復路で行われている。その他に、宿坊や研修施設との回答があった。

班別自主行動

前回調査で初めて80%台を割り70・4%の実施率だったが、今回は国立、公立、私立ともに実施率が上がり全体で82・8%となった。

過去の実施率をみると、06年が92・1%、07年が85・2%、08年が87・3%だった。

実施場所は、京都市内と東京都内、長崎市内の3地域だけで、全体の70%以上を占めている。

体験学習

体験学習の実施率は、全体で58・5%だった。前回の59・2%より0・7%減少しているものの、全体としての傾向はほぼ変わらない。

実施内容を今回と前回調査の構成比率で比較すると、「料理体験」は前回12・5%で第3位だったが、今回は17・6%で第1位になった。「伝統工芸など」は前回25・1%で第1位だったが今回は15・4%で第2位。「スポーツ体験」は前回16・0%で第2位が今回13・9%で第3位だった。

ここ数年は、上記の三つの体験学習が順位の入れ替わりがあるものの上位を占めている。また平均費用は全体的に前回より若干上がっている。

体験学習まとめ

ここでいう体験学習は、いわゆる「体験的な学習活動」を指し、新学習指導要領でも大きな位置づけがなされている。

「特別活動」の「学校行事」のうちの「旅行、集団宿泊的行事」である修学旅行においても、この体験的な学習活動は積極的に取り入れられ、普段学校ではできない「まとまった学習の機会」となっている。

しかし、体験学習の採用に際しては、学習効果や安全性の確保、費用対効果などの点から、さまざまな問題や課題があると指摘されている。

生徒の発達段階、日常の学習活動との関連性、費用対効果、安全性などを考慮し、地域の実情も踏まえながら実施することが望まれる。学校と受け入れ地との間で、教育上の観点に立った協議が望まれるところである。

和文化や作法を学び温泉文化も体感する

としては、市内を吟行体験する「明治体感！松山はいく～松山城・句会ライブ青春編～」や「松山はいく～道後パワースポットはいく～」などを用意している。また、地元大学生や留学生とふれあい、交流をしながらの吟行体験もできる。

和文化や和の作法を体験――道後温泉

松山市は、主要施設がまちの中心部にコンパクトに納まっている。宿泊先として推奨している道後温泉と各施設は車で10分以内の距離にある。また、宿泊施設の食事やもてなしは、修学旅行生も一般旅行者と同等レベルの扱いと折り紙つきだ。

こうした道後温泉の特色を生かしているのが、宿泊施設や道後商店街と一体になって開発した夜の体験メニュー「プチ研修」と「ぶらり散策」だ。このうちプチ研修は、夕食前後の時間を利用するもので約15分の研修。会席料理やお座敷のマナー、食育などで構成されている。時間を有効に利用できると好評だ。一方のぶらり散策は、明治の雰囲気が漂う道後温泉本館をメーンに据えたメニュー。本館前での集合写真や特別料金で乗車できる人力車がセットになっている。また、俳都・松山ならではの取り組みとして、散策中につくった俳句を商店街などの特設ポストに投句すると、後日、最優秀句にみかんジュースが贈られる特別イベントも行っている。

なお、夜の体験メニューの安全性は、市職員やホテルスタッフが責任を持って確保している。

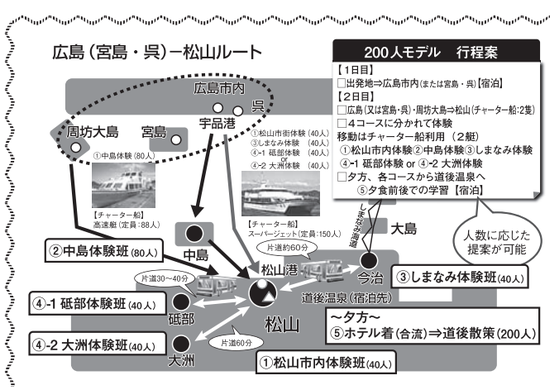
なお、瀬戸内海、松山・道後の両ゾーンだけでなく、環境学習の砥部動物園、伝統と文化や自然に触れる大洲など、周辺ゾーンも魅力的だ。

モデルコース

平和学習や民泊と組み合わせたコース設定も可能

愛媛県外から松山市を訪れるには、海路や陸路などさまざまだ。同市では、多様なモデルコース作りに取り組み、充実に努めている。一例として「広島―松山ルート」（上図・200人モデル）がある。同区間には定期便も運行されているが、チャーター船利用で、自由度の高いコース設定、スムーズな移動が可能になる。穏やかで晴天率の高い瀬戸内海用し、宮島などから直接松山入りした。生徒は、安全で快適に約1時間のクルージングを満喫し、学校では修学旅行の貴重な時間を有効活用できたと好評だ。このほか、山口県東南部にある周防大島でマリン体験や漁業体験、民泊体験を行い、チャーター船で松山へ入るコースもある。

また、最近は民泊体験や平和学習との組み合わせ需要が増えている。それにも対応している。バス利用のモデルコースでは、明石海峡大橋を渡り、四国のほぼ中心に位置する徳島県西部の「そらの郷」で山村暮らし体験や民泊体験を行った後に、松山入り。帰りは、瀬戸内の資源が集約しているしまなみ海道を利用し、帰路へ着くコース設定も可能だ。



—協力—
松山市産業経済部観光・国際交流課
〒790-8571　愛媛県松山市二番町4-7-2
TEL089-948-6557　FAX089-943-9001
教育旅行専用ＨＰ
おいでんか　松山　検索

中学校の修学旅行実態

日本修学旅行協会　教育旅行年報から

体験学習6割が実施

「いなか暮らし」に注目も

日本修学旅行協会（河上一雄理事長）は、教育旅行の実態を調査、年報にまとめている。2011年度に実施された中学校の修学旅行調査から体験学習を中心に要点を紹介する。

旅行費用

旅行費用の総額は、平均6万1475円で前回調査とほぼ変わらない。また、国立と私立の一人当たりの費用は若干高くなっているのに対し、公立では前回調査の費用平均額よりもマイナス956円だった。

費用の内訳構成比にも大きな変化はない。交通費は前回調査42・6%が今回は42・2%、宿泊費は前回も今回も33・3%、体験学習費は前回7・3%が今回は7・5%、その他は前回16・8%が今回は17・0%だった。

費用内訳（生徒１人あたり）　（円）

項目＼設置者		国立	公立	私立	全体
総費用		82,039	58,497	86,304	61,475
内訳	交通費	40,358	25,253	34,438	25,761
	宿泊費	24,295	19,682	28,493	20,271
	体験学習費	5,091	3,874	6,134	4,575
	その他	12,662	8,812	15,012	10,340
1泊当たり宿泊費		8,605	9,135	9,498	9,153

旅行内容

今回の調査結果では、旅行先の第1位が京都府だった。その結果、遺跡・史跡・文化財・寺社などの見学が連続第1位となっている。

それ以外の内容で順位が移動した項目をみると、「自然や野外活動体験」は前回9位、今回は5位、キャリア教育の一環で行われている「職場訪問・職場体験」は前回14位、今回は7位。「伝統文化・伝統芸能や祭り体験」は前回13位、今回は10位、件数は少ないが「いなか暮らし体験」は前回の22位が18位にそれぞれ順位を上げている。

近年、全国の農山漁村で、修学旅行などの児童・生徒を受け入れ、地域の人々との交流と触れ合いをテーマに、暮らしや文化、さらに農林漁業体験などを軸にさまざまな取り組みを行ない、こうした地域を行き先とする学校が増加している。

児童、生徒を受け入れる農山漁村は、北海道から沖縄県まで各地で取り組みを展開している。全国約140カ所にのぼる小学生を対象とした「子ども農山漁村交流プロジェクト」の受け入れモデル地区でも、小学生と合わせて中学生の受け入れを行なう地域が多い。

一方、「博物館などの見学（前回調査は美術館も含む）」は前回の3位が、今回は博物館などの見学が6位、美術館などの見学が16位だった。

魚さばき体験やそば打ち体験、また郷土の伝統食作り体験などをはじめとした「料理・食品加工体験」は前回8位、今回は13位と順位を下げた。

前回調査で25位の冬の代表的なスポーツ体験スキー・スケートは、今回16位だった。スキー修学旅行の実態は、昭和40年代後半に主に関西地区を中心に始まり、昭和50年代に顕著になったが、学校行事として行われていたスキー実習やスキー修学旅行の実施校は、ピーク時に比べ年々減少傾向にある。スキー体験時間が、以前より短い学校も増えつつあるようだ。

また、近年は、スキー、スノーボードなどのほかに、雪上を楽に歩行する西洋かんじきといわれるスノーシューを利用して、大自然との触れ合いをテーマに、冬の自然観察などを楽しむ体験活動を提案する地域もある。

旅行内容を主な旅行内容や目的に重点をおき、その割合を「分類別旅行内容」として分類した。そのなかで、史跡・町並み・産業遺産・博物館などの見学などの歴史学習は約半分の46・2%、伝統工芸・料理・食品加工などのもの作りが9・6%、平和学習が9・4%、ミュージカル・演劇鑑賞、伝統文化・伝統芸能や祭り体験、美術館などの見学、コンサート・音楽鑑賞などの芸術鑑賞・体験が9・1%、野外活動・環境学習などの自然・環境学習の分野が7・88%であった。

なお、回答数1810件の内、この五つの内容で全体の82・1%を占めている。

分類別旅行内容
（件数）

歴史学習	836
もの作り体験	171
平和学習	172
芸術鑑賞・体験	164
自然・環境学習	141
キャリア体験	75
スポーツ体験	71
宗教体験	50
生業・くらし体験	46
学校見学	8
交流体験	7
奉仕・福祉体験	3
その他	65

宿泊地と形態

宿泊地の第1位は、前回と同様に京都府。前回2位の東京都は4位、前回4位の千葉県は6位に下がり、8位の岩手県が消えたのは震災と原発事故の影響と考えられる。

一方、前回5位の北海道は2位、9位の大阪府は7位、10位以下だった兵庫県が9位に上がったのも同じ理由。特に北海道は、北海道や関東の学校で東北に出かけていた学校のほとんどが、北海道内に変更したためだ。

構成比率は、1位の京都府で前回30・8%が今回32・0%、2位の北海道は前回4・7%が10・5%とともにアップ。4位の東京都は14・4%が8・0%、6位の千葉県は6・7%が4・0%でともに下がった。

宿泊形態の構成比率を前回調査と今回で比較すると、ホテル形態は前回59・5%が今回60・1%で微増、日本旅館形態は前回32・6%が今回31・7%で微減だった。

そうした中、増加したのが農山漁村民泊で前回調査1・9%が今回2・7%になった。

船中泊はすべて公立校で、その80%は復路で行われている。その他に、宿坊や研修施設との回答があった。

班別自主行動

前回調査で初めて80%台を割り70・4%の実施率だったが、今回は国立、公立、私立ともに実施率が上がり全体で82・8%となった。

過去の実施率をみると、06年が92・1%、07年が85・2%、08年が87・3%だった。

実施場所は、京都市内と東京都内、長崎市内の3地域だけで、全体の70%以上を占めている。

体験学習

体験学習の実施率は、全体で58・5%だった。前回の59・2%より0・7%減少しているものの、全体としての傾向はほぼ変わらない。

実施内容を今回と前回調査の構成比率で比較すると、「料理体験」は前回12・5%で第3位だったが、今回は17・6%で第1位になった。「伝統工芸など」は前回25・1%で第1位だったが今回は15・4%で第2位。「スポーツ体験」は前回16・0%で第2位が今回13・9%で第3位だった。

ここ数年は、上記の三つの体験学習が順位の入れ替わりがあるものの上位を占めている。また平均費用は全体的に前回より若干上がっている。

体験学習実施内容

順位（前回）		体験学習内容	件数	構成比%	平均費用（円）
1	(3)	料理体験（そば打ち、お菓子作りなど）	166	17.6	1,943
2	(1)	伝統工芸、ガラス細工など、ものづくり体験	145	15.4	2,229
3	(2)	スポーツ体験	131	13.9	4,589
4	(7)	焼き物、陶磁器の絵付けなど	65	6.9	1,665
5	(5)	坐禅、法話、講演など	45	4.8	998
6	(4)	農山漁村体験（酪農、植林などを含む）	40	4.2	2,987
7	(10)	染色、織物など	35	3.7	1,693
8	(9)	職業体験（企業訪問、職場見学、商人体験など）	30	3.2	1,254
9	(6)	自然体験（洞窟探検、環境観察など）	27	2.9	2,356
10	(8)	芸術・文化体験（演劇、音楽、絵画など）	25	2.7	2,513
11	(11)	防災、福祉体験	5	0.5	0
12	(12)	その他（平和学習・個人、班によって異なる）	229	24.2	2,173
		合計	943	100.0	2,351

見学先

11年度は、東日本大震災の影響で首都圏は大幅に減少、関西圏はほぼ横ばい、平和学習としての沖縄県、長崎県、広島県は定着。そして沖縄県の海洋博公園、国際通りが前回より順位を上げた。このうち広島、長崎、沖縄での取り組みにスポットを当ててみる。

広島では、次代を担う子どもたちへの新たな被爆体験の継承と伝承に取り組み、市民が主体的に活動を展開している。一例として原爆ドームを前に中学生による被爆ピアノでの演奏や子ども平和会議を開催するなど。

長崎では、中学の修学旅行生と高校生1万人の署名活動を行う地元高校生との交流などを通じて、高校生の力で原爆の悲惨さを伝える活動を推進している。

沖縄では、多くの戦争戦蹟が語りかける真の意味は何かを、生きる視点から捉えている。地元大学生などの若者グループが主体となり、壕のガイドなどを通して参加者とともに学ぶ、新たな取り組みを展開している。

本社キャンペーンテーマ　観光立国実現は、地方（地域）から推進を

地域の未来を皆で見つめ直し
観光力を創造、発揮する時代

観光経済新聞がお手伝いします
永年、全国で観光地活性化座談会を展開した実績は、比類ないものです。
座談会やシンポジウムの実施を通して地域にふさわしい方向を見出してください。

地域産業　地域行政　観光産業　地域住民　新たな観光資源

観光関連事業者だけの観光産業ではない
地域内の一般産業も観光と無縁ではない
住民ホスピタリティなければ観光地ではない

域内4者座談会
シンポジウム
開催のご提案

お問い合わせ　観光経済新聞社・産業観光活性化支援室
TEL03-3827-9800　E-mail:info@kankokeizai.com
地域活性化シリーズ座談会資料（PDF版）はメールでご請求ください。
ご要望に応じて企画説明へ担当者派遣にも応じます。